

全十部合卷

熊坂
傳記

東海道
松之白浪
全

板元



13
2057
1



へ13時
2057
/

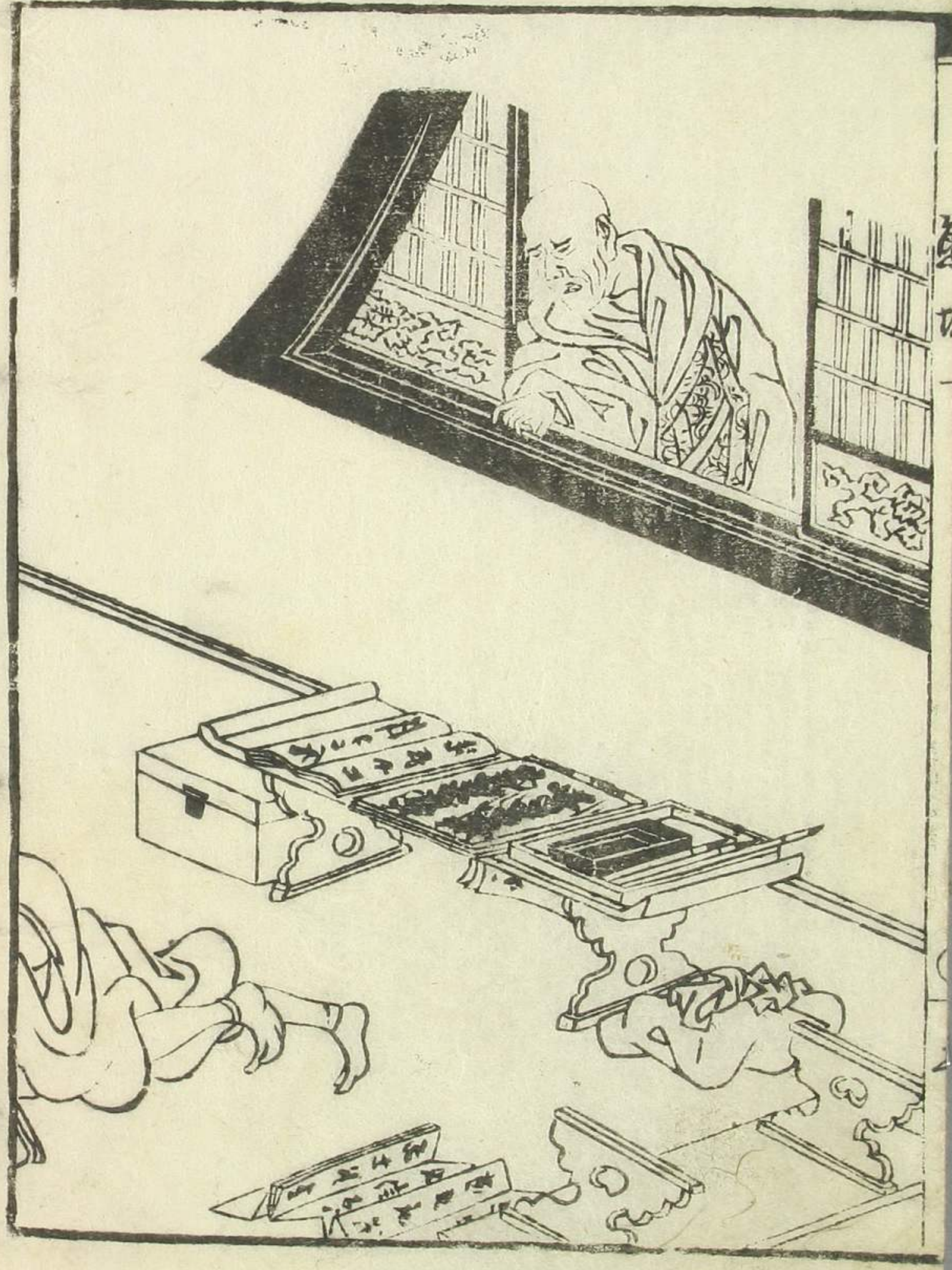


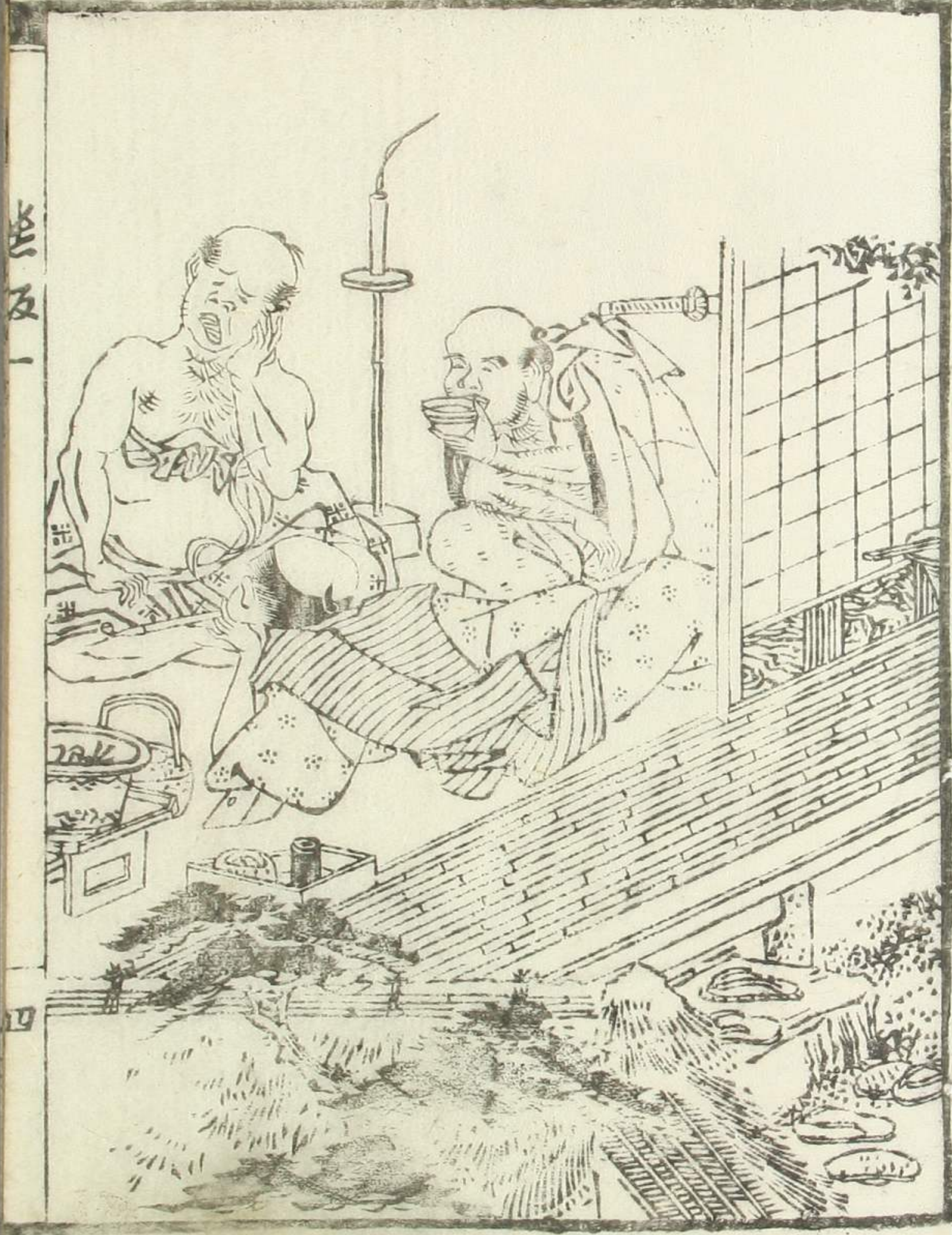
此、人王七十四代とむのいんのもちうらまよるちこの
 國、能坂といふ中まぶさふ百性、差を情といふをれ
 り、好正一きふさんきちゆうとたいこと一てくじし
 り、ごとうくまへ四十ふおよぶまていつるあき事と
 うせへある日ふり好そうごん一て中まをこのうへお
 あり一ひらいて神の中一ろくろんとさけ子を
 さづらんともしてうらまをくさんいいていの
 あんづるおけ神平井の保昌がおとをるんぞれ
 中らすけのさいともありなるおやいすまを志ん
 きを志るぞけ中らいつのほ何ものか中らま一
 とりふりすとおのりれえ志るまをまはる志んどん
 おいきぬおやいつり一女がうらまお介てあさる

美坂一

〇一

藤治郎
入學の
時友と
口論



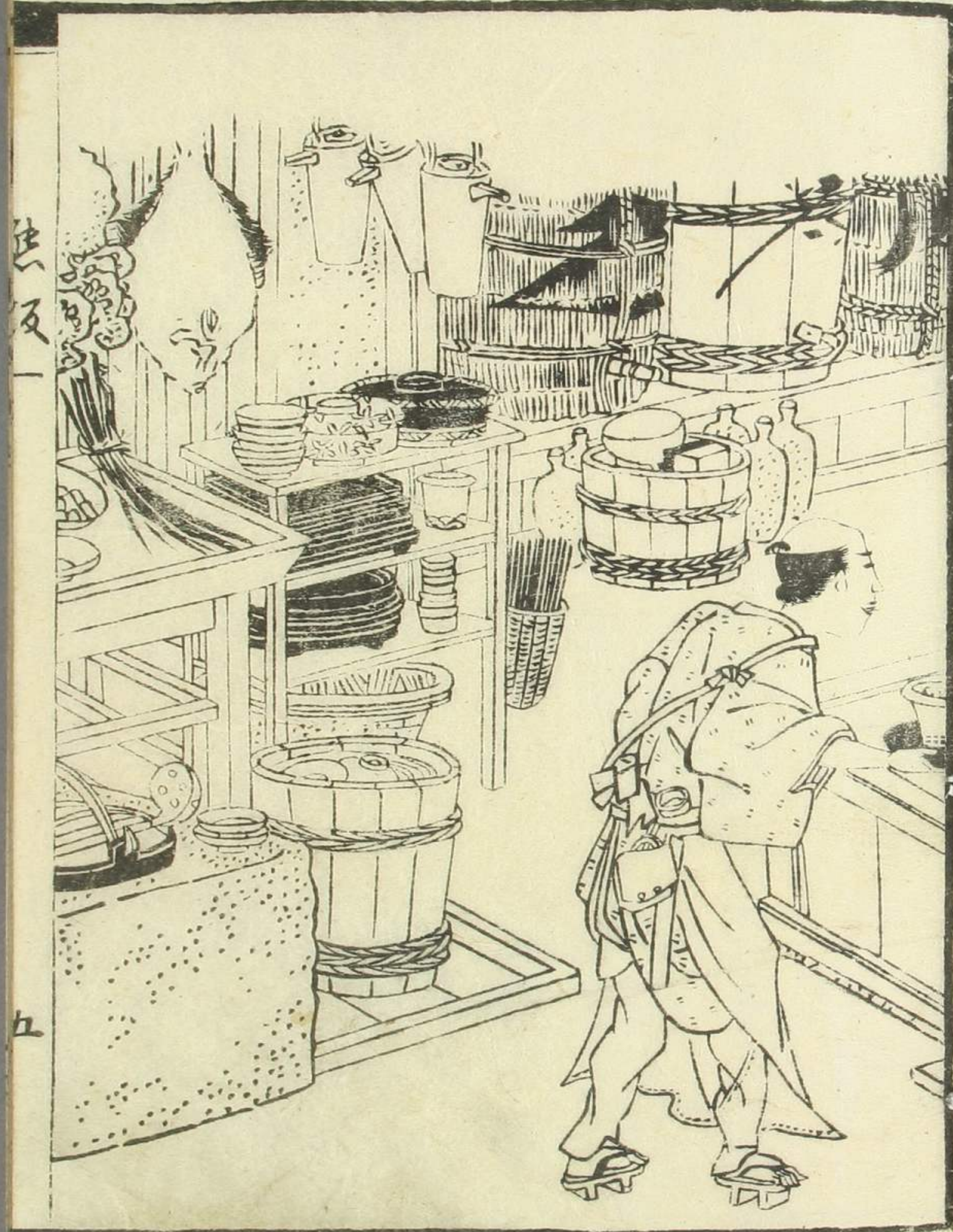


美及一



酒^{さけ}立^た女^{をんな}
 給^{たま}ひ^まさ^き
 小^こ柄^{がら}と
 うら

美及一



徳及一

五



小柄と
賣つて
酒食
つよ

徳及一

一々赤銅金裏うぐも高彫りて焼令とつふるも
申す此世無んとの之所致るて見えて世のよん
きざし比日酔伏する中をこれ小盗取小伎のうりて庭へ
とつとを来り草履のうりにてくもこ一返りぬかほ
みて存ありあり吐るとするうち助甲とたつふいと
迄く脇差とつとをこ小柄あるいろくせんきまれども知れ
いぢまのどくふひあちちとほのちぬ客も家内
も常とときたひとさひるどまうちるてりも同く
たごふあり着類とにためんせ皆くあつたつて
いともどひ例のどくつとをたれあふぬかめてよりるを
おそるろくまを返り

一之巻

人のい白ねまぬのそくいろくおをるあひのえは次郎の
小柄とぬき人の目ふらぬく一持行金と庭ごとく
初は土中へゆりまをづこの酒やあれたらひたるよりて
亭主小賣あつての法とて酒肴ふきひ捨のちハ餅
く庭中のものある一ぬ是盗人上戸のたぬぬ是はして
ぬき女のあつとおほへある夜近所へ家ののちけ已が
内より七八丁こまき小安兵衛といふ大百姓の門ととさうる
四ツとも思ふ以内大勢の吐きまこ一也何と中ら浦
山くくどく一て門へ入るお一行つるふちりるき事あると
ふへく百仕の男女もつとをよまき幸と忍び足してはぬ
とも盗血とんとこん血以内男サス付中と盗血人よつと
わけきりし由一庭と逐出ーが大せいとりかこそのん

少こ女め通と古こ郷ごう
と



註
二

註
二

了やるゝ家居る男をわけまじを逐るるゆゑに
 の所かき逃れ智といひあつとつれ男共のこらさう
 手比のやとん付まをさのるれあひの戸へかまらせに
 投つけるはもの音ぬま次血人か戸を破るとわけ出るを
 さきとんていつえぬ逃出るゆゑととも追つるべし
 ゆりる是の二十才のまのすふありる異税子そふ似る
 この有井戸へ石を投入もいひ比世税といひて後毒の
 作者余人の身のうへにぬぬまかへしとのやを活らむや
 十六才とあり前髪をさう男とありるうぢも悪行
 中身して廿才の比の盗賊のんか身して両親も是とる
 志とるうは名主助四郎がむまめ二人有りて十七才を
 ちやといふ鄙よの押まゆとあつり近き若老ども

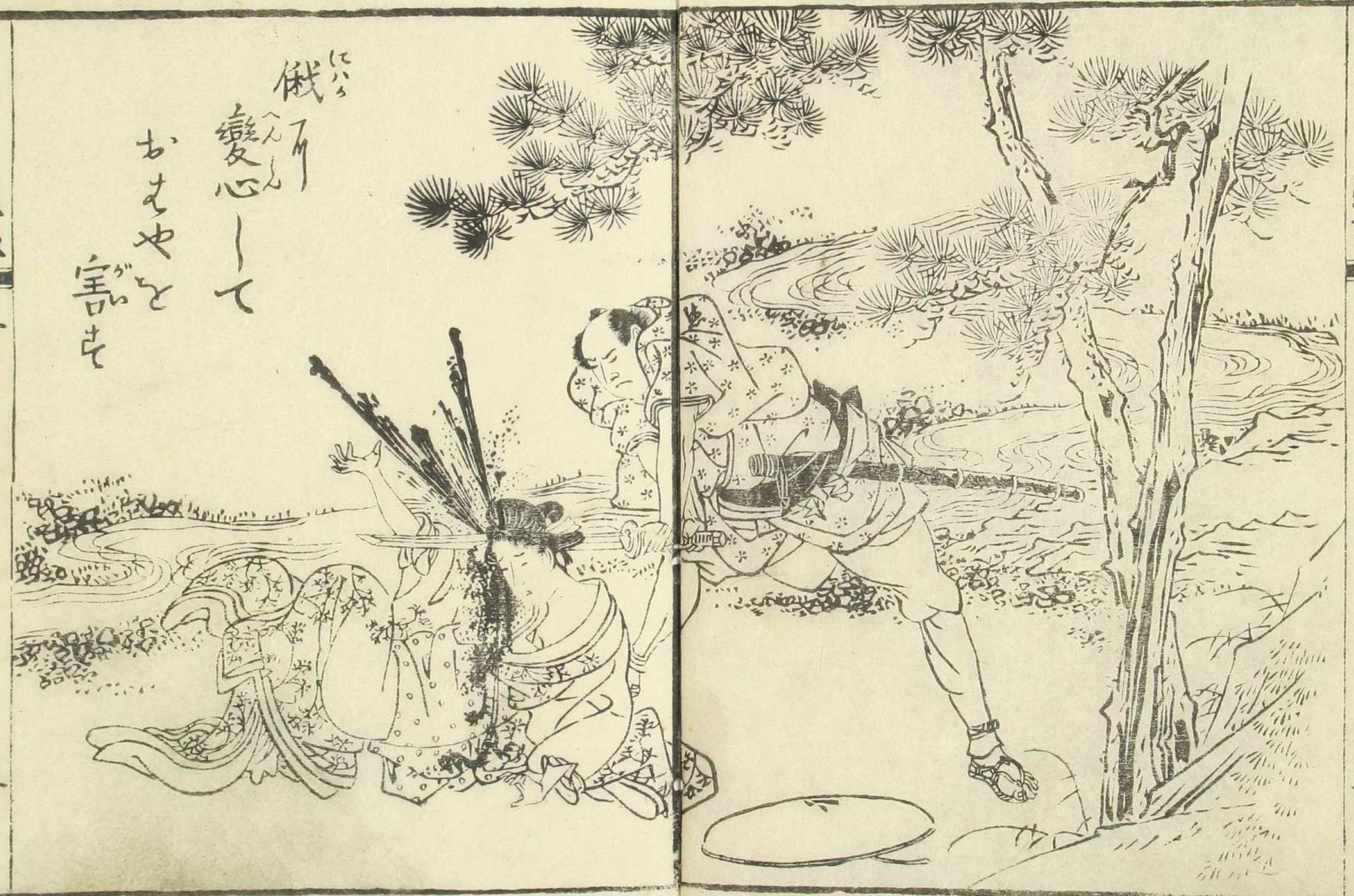
錦木の殺つり逃れもさうにゆゑもあはしむべしいつの
 比うるはいと人志まむんとあつり藤下とぬまと
 おひの金銀を服のたひとんのまふありとりて樂と
 以る立年するの比吉親ももうもく志ま近所ふても
 評判あつり由志まさんいまあつりてあはれまとおひし
 り逃れおまやもあつりいひておたじがよめ顔をあけ
 とつらつ秋身をいづくいあるおはなまをつきて立のまは
 道まの仕とつたぬまをひひとんと女んのちまな
 思ひのたあとおつり藤下聞かも太きけあつる
 うのけ地ぬるが居る方のさるたげをや付くせよと云はし
 今子へえが立すつものいひ其外千道具のたひひまて
 風呂おふ包も夜ぬまぎれく住るまなるまを立の足



二人つておめてふやどくも上へいんくのぼりるるるる
 夫婦仲がよきまをばいかに助四郎のさげなせうつり
 藤治郎の行末まのれ人となるはまあふまぬくじし
 おりも面白くおすツの二人りうゆふたづ社ニツのまの
 神社佛園といのりて後世をなまからんと夫婦をいん
 志てまじの田畑とくしりるる一それを海用としてつが
 する里ををある世中のちのゆふまを志せざる多きとや
 三千の罪不孝より大ひあるおやと三睦二つとらおや
 といニ親よりうふをわけゆくまかんぞよらんや二介
 つて立古卿と出くみゆこのまをばとん一ていん
 乃まきり越中の玉砥波山といふ山とまきりるる地
 昔木曾義仲平家と合戦有一所めていんおまを
 せんおやうへおやあふるるたびふつとせくる一みろ道

はからるる加ごととまて種くると海銀をつひまてか
 の着類も賣拂いまうらふほもあく山中の木根は腰
 うちあけて休らひるおやあふのつあまねむけじらるを
 履てつとぐとんておひひるのれは女あまあひ教へつて行
 たまふとて垂つる道を知はるんまはまのりあやうあり
 いまあふらうひちとんまのり人志せばおひあがれ知
 るのあらんいふをさうまひまを海用としていづらあやうも
 由んと思ふ志まのり例の悪人志まはるるおまをさるま
 おまを社むりいやあふるるを幸とまや日も西入相の社て
 くる三足帯とまはしとく社ておまをを教はつと
 なるおまはねるるをさうまはるるおまを二足帯とま

俄^に ^ハ ^ハ
變^{へん}心^{しん}一^して
おまやと
害^{ガイ}を
そ



三

三

えぞ
山賊
よ
逢く
勇とく
あ
ます



先ふまゝく山真十町を切りゆく行ぬたるあまよは火のうら
 りはあれがをんぐらが住家あるやとさひらきつる辰沢のま
 もとよふとをあらまうちほどおく門口へ来て足音を
 まてて内へ入る大男今夜の仕するいふおとりの辰沢の
 まもつとびきると入先二藤二郎と上座をぬり内なる男の
 よすすちりちりあやうなきが彼男舌づひしておきまはるこれ
 らの遠品生むゆて浦の与市とのふ者也先の夜たび
 人のいふおの先さまの世産いづる由へ夜をさうたけまき
 新すさあづらるおとりのとてよくあふさうの辰沢山中の
 とあつせりるを取並ぶる下へまめくなく會するたぬより
 て後藤二辰沢は向ひの山へある人あて山賊の業とまらや
 とたづねる辰沢の身のまきさひるまきするの山賊先祖の

名をさとあつたの辰沢藤二郎とす其外三國九郎麻生
 の松若柳下小六並寄源太蒲野与市との由ひまよあるの
 こもあせと血氣おまかせ悪行とあつたは山賊まら入る
 とあまののちと知るまきよりの指子とあててもとにぬり
 砥波山まて女を教へる子細とくすり找上方のあるとておは
 祇びあつた辰沢まきよりの業とあさんと則山中のとあてこの
 頭とあつたあつた辰沢まきよりの業とあさんと則山中のとあてこの
 おとやと教へる辰沢まきよりの業とあさんと則山中のとあてこの
 娘かおん祇を休むんとまら辰沢は相談してやぶひのあま髪
 と剃る辰沢まきよりの業とあさんと則山中のとあてこの
 をんと舟張の辰沢まきよりの業とあさんと則山中のとあてこの
 と共に辰沢まきよりの業とあさんと則山中のとあてこの

物見の松之圖
誰人古き狂歌

長軌
あての
むや
梶井乃
宿の
名



てはふの海沢入るど名のり熊坂才のひ下之を外打とて
 左とよの習ひあは諸國の悪黨熊坂強執成と聞
 つまこれとてひ下あつきくるとや先熊坂のひ下ひ出羽國
 仙及の由利太郎上野國赤城竜夜及藤岡源八越後信濃
 悪とてひ下及む三河の國の失作十郎駿河の言里の
 裾野に住居する高根四郎奥津治郎山城國三條三
 壬生の小猿河内國よ常延坊覺俊其外ひ下の者つふ
 百四十余人追ふあつたりとて熊坂山中ひあくきあを
 あつたりか久安二年の春の比治山にやたるひま京洛中
 のもんうの地とつす是かあひ立神社佛閣とつてあらざる人
 まあつんとつてそれいざのゆえ又ニッまあをやどのいざ
 のためさつひまざるべき出家の形あてのほり追きよ

賊徒 歸伏
恐也
猛威子



今もいけとせんと熊坂のいあせせむらうのSSのびりや
 とまぎとけいけいふらうものさびらちあけいれとあけいれ
 こものびらうやまごころか旅傍までとるなまふり取
 ころへ松若と下人まうらうの物とあつせ熊坂の和尚若
 正化は仕立終つての者ともますの上とまふりつけ一人述て
 はふとで京とんまの程多く上京せらちうあさうさう
 何とせも鄙まのまきゆけく三人とあぐめ目とよらうを
 せ京都は五十余日とついであひのまのいりの一を極め
 まふふああらんとはくしくらう山のまようぬ函金とまひ拵
 道中のせらてあくまきまらふけ時出のわく村人とお
 中仙道はあつまらうらあち川高宮のやうらうのせら
 大寺ありくまらうあ社とユ一りあせげ寺に立りて
 住僧あつめんしやたらういふさう天あちどのまに立寺と中
 てら子あせ者へは及京らんまうらう中あつていあめん
 き仕今日も途中とつてあつてあきりあさうあああ
 困入いれ寺とつんけつむ志んやあられ暫く休足させた
 をせよとやあせの住僧あつて合まなごきこし
 ちあせしうらう中とつてあせ中しなるとよらうびりよく足の痛
 みてはよせのよしあめんあつてあせあせあせあせとてあ
 ころとつて熊坂のわくのつら休とつちあつて麻生いつたのま
 祇園みあく園へ入くあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 う祇園のまあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

大寺ありくまらうあ社とユ一りあせげ寺に立りて
 住僧あつめんしやたらういふさう天あちどのまに立寺と中
 てら子あせ者へは及京らんまうらう中あつていあめん
 き仕今日も途中とつてあつてあきりあさうあああ
 困入いれ寺とつんけつむ志んやあられ暫く休足させた
 をせよとやあせの住僧あつて合まなごきこし
 ちあせしうらう中とつてあせ中しなるとよらうびりよく足の痛
 みてはよせのよしあめんあつてあせあせあせあせとてあ
 ころとつて熊坂のわくのつら休とつちあつて麻生いつたのま
 祇園みあく園へ入くあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 う祇園のまあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて



首長と
頼
山家子
中
た

と合せて一通り盛のうらる毎とて金銀とて務めて知
 進より先和尚の居る思ひい里秘するを幸するのりお
 のつらまらぬれとまきようといふおとけま起あがらんする
 所と大口とておとけら色をばらばら叶にばらばらとららんする
 とまらとてまらばらばら口ぬをばらばらとてとて熊坂の入道張さん
 とのよ盗賊の長本ありけ寺の金銀ととらんたためびばら
 とつらより一宿より志んドやゆ金のありあよとておんよよま
 めくつらまらまらとて立まはの上松若子饒とてせ其
 たり和尚と先子立とてとておんよとてとてとてとてとて
 さつ種る奴系とて紙一抱子まらとてとてとてとてとてとて
 おんあのをせ有金八十とてとてとてとてとてとてとてとて
 かけいて三人とも足とてとてとてとてとてとてとてとてとて
 摺針峠と

いふあん志よおぬり山中より三人ともいきまらつまは十あ
 金とあつたあつとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 くのまら近江の國の盗賊に摺針太郎同治郎兄
 第と大えとてまきの曲者へ山のふもとにいりしつ性来の
 たび人は出まらびまおびおーくふまびんはしてそのまみ
 久如あらんとて山中ぬぬり熊坂ホ三人が休足でてと
 くて大まきとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 とてとてとて二人はむつひまあつたてとてとてとてとてとて
 ほととてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 何人ぬてはあつたあつとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 まららあ人まらとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 せまきとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 組り

熊坂 入道
張大と
名の

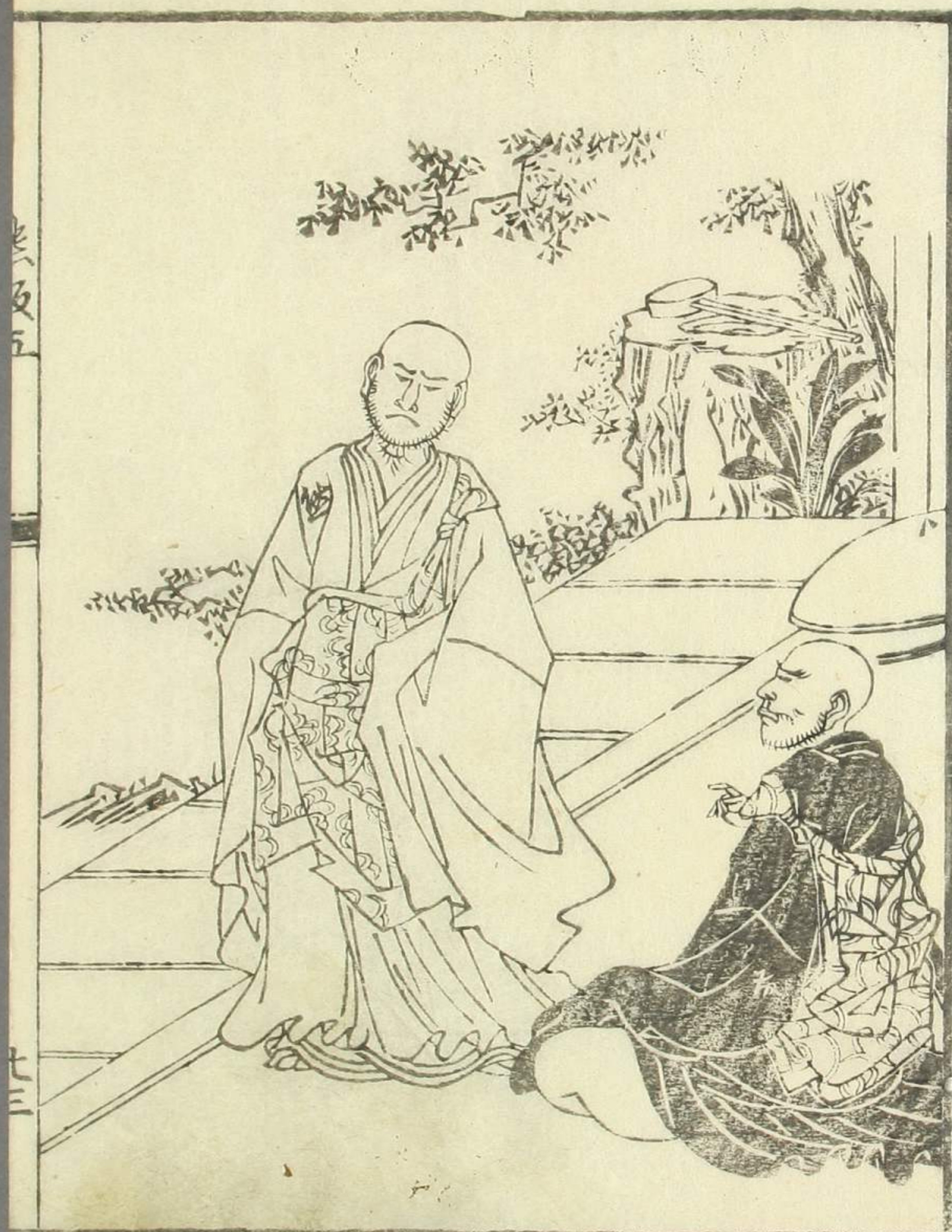


藤澤 太郎
其物
末と
うる



はりたつときよろだいとまゝに松をいづれよとて
 大かみて志ばいづれに合はせど双方せうぶつて
 ざりたつ時熊坂いづれを太郎首まどつて
 たきまうと是とて兄をまゝと松をまゝを
 かけよとてさうさうさうさうさう先つて
 中ちま人とつておまゝいづれに山賊とて
 小まよやくまき血滅の張本熊坂入道とて
 物今惜くは下につけ庵んどはまてふ
 々世はまのむり兄弟大きふとどろい
 ま人と助る相針兄弟いづれに下
 とり熊坂があととつて伏山とい
 くらさういぜい下の子らるる
 あり由縁とて用んちとてたど
 折て富貴とありさる内へ
 して極くあやうとて又用ん
 くらし一晝夜用んまゝとて
 然室とてお持まゝの天道是
 まづうひあ一皆く庵い
 坂つ下下の悪堂八百余人
 足沢とていづれとて相針
 中三國壬申の小猿三系
 熊崎貞津浦野天作十花
 八高根の雪志樹つ渡の
 してつらきまゝとて七十

あり由縁とて用んちとてたど
 折て富貴とありさる内へ
 して極くあやうとて又用ん
 くらし一晝夜用んまゝとて
 然室とてお持まゝの天道是
 まづうひあ一皆く庵い
 坂つ下下の悪堂八百余人
 足沢とていづれとて相針
 中三國壬申の小猿三系
 熊崎貞津浦野天作十花
 八高根の雪志樹つ渡の
 してつらきまゝとて七十



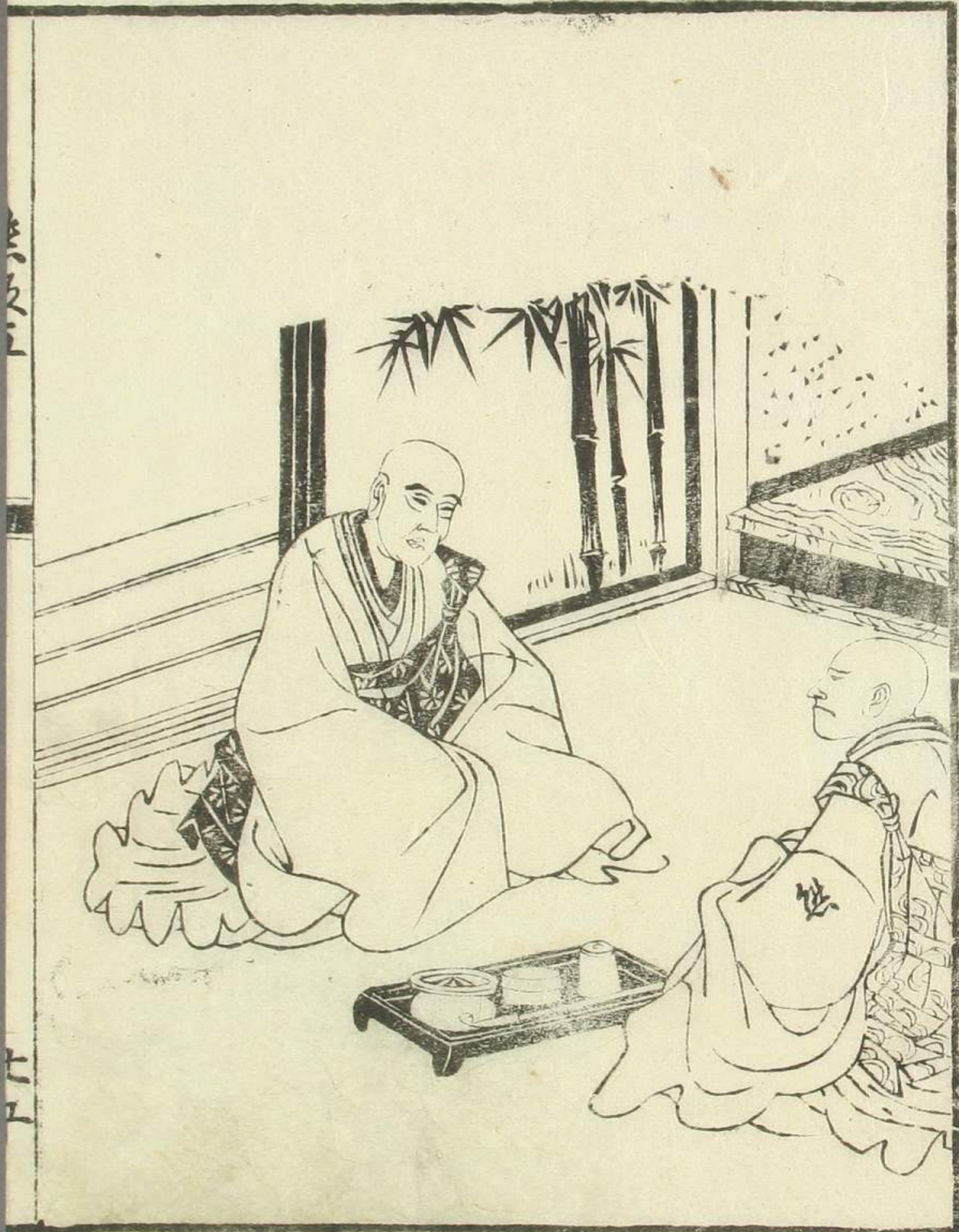
悪意と
含めて
洛陽小
おもむく

能
地

五

出くたびびとのそ何物とてふひ町家百姓の方へ礼り
 田々西悪逆いやすくくる由へ越前名ちごまよ及び加賀
 越中信濃甲別駿河遠加三列け國とをオのそして
 志よまんともくくあんぎま及ひるけ時系赴きて河原の
 つかひさるあまぶらうの泣血人をいさひしむとて
 司地取らるるもとがむる者あをむむ程もあくとくはり
 能坂あると尾別也知郡と内下中村といふ亦百姓
 徳を討つといふの方十五六人よて押さふ入先ての由
 を極さくるとあけあ内^{つら}の者はけるいそ中むら奴系
 とくそ一が引くそめきをたたくとてけ不持の
 今より百両あまうらびる内百支と亭五のまよ
 とまやろるははらんあるたか坂まんとをまざん祝ん

なるぞ一前の中そくとあまむむぞ一とわうむひをあら
 そのほもたんぎんてん^{かまけ}もあつくとんぢまつらす
 今もはまとりとせじてうせざるが十年の内はそこの
 通りまあんとしていもよつはるそそに去^{えぬ}年活年中
 平家のたれふろびうせするたろの^い美勢の九男けし
 ころ丸平家の大お清登のそらひひて鞍^{かま}山東光寺
 一者梨の方へつげ八才の時がけ山よて^{てまひ}お^あ学^が文^の心^こ
 とむぬよの傍正が谷といふ深山のるまて山猿と合ふと
 して^あ叙^の術^をや^つて^ま由^き中^こと^たを^ま月^日と^て孫^て
 さいて^しむ^む種^をく^十五^才と^也なる多^か流^のよ^の人^よよ^こて
 凡人とらんごりなるけま付の母常盤のそる色とけつぎ
 うつく^しや^まも^ちら^なれ^ば山^法師^とも^んと^け色^とあ



辨べんと
 振ふく
 任にん僧そうと
 ああご
 むむく

五
 五

いより千米の毎いさる事と此ひの毎のうらまはる
 くいつていさる事なりたる半若丸常く思ひたる我一友の
 祖父お茂と義朝の仇たる半家とやらほ源氏
 一統の毒の中とあるまんのととめくきんし由川ぶいさ
 んがけしとや毒ふ半若丸傍正坊よの夫天物子細術
 とおろしといつたり実の傍正が谷よて多くの山猿とお子
 とて受へたる搦流のくんと由つて闇夜よの猿のまらこ
 光つら流りし由てんぐかりとつしむ屋あるう形
 こよ奥州結守府のお軍御館持太郎とちつたの
 朱方むらととよの源家よ思とていさるりの由今平
 家の盛んあるといきとより源家の有ともなきうと
 何とぞよ朝の子供とてきついのれとよんとす

